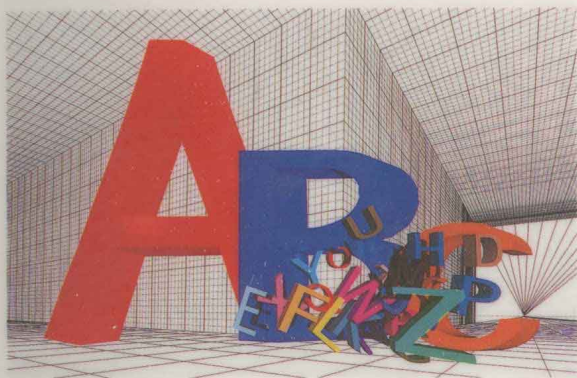


英語を学ぶなら、こんなふうに

考え方と対話の技法

加藤恭子 *Kyoko Kato*



76

NHK BOOKS

[803]

英語を学ぶなら、こんなふうに

考え方と対話の技法

加藤恭子 *Kyoko Kato*

76

NHK BOOKS

[803]



加藤恭子 かとう・きょうこ

●1929年 東京に生まれる。1953年 早稲田大学文学部仏文科卒業。1957年 ワシントン大学大学院修士課程修了。1965年 早稲田大学大学院博士課程修了。マサチューセッツ大学オノラリー・フェロー、上智大学講師を経て、現在、上智大学コミュニティ・カレッジ講師。専攻はフランス中世文学。

●著書『アメリカへ行った僚子』（中公文庫）『日本を愛した科学者』（日本エッセイストクラブ賞受賞、ジャパントイムズ）『ヨーロッパ心の旅』（共著、ロゲンドルフ賞受賞 原書房）『アーサー王伝説紀行』（中公新書）『英語小論文の書き方』（共著、講談社現代新書）『ニューイングランド物語』（NHK ブックス）など多数。

NHK ブックス [803]

英語を学ぶなら、こんなふうに 考え方と対話の技法

1997年9月25日 第1刷発行

著 者 加藤恭子

発行者 安藤龍男

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1 郵便番号 150-81

電話 03-3780-3317(編集) 03-3780-3339(営業)

振替 00110-1-49701

[印刷] 享有堂印刷所 [製本] 豊文社 [装幀] 倉田明典

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-14-001803-8 C1382

目次

1 なぜ、英語を学ぶのか — I

日本人の英語は通じない？ 英語は本当に必要か？ 外国語が「必要」ということ 自国語と外国語 ここは、日本 なぜ英語を勉強するのか 英語圏の人たち 英語を使う理由 手段としての語学 楽しく学ぶ 私たちの場合 トリリンガルの友人 子供が言葉を覚えるとき 英語だけでなく他の外国語も

2 英語を学ぶために — 27

アメリカでの語学学習 苦しかった二年間 「私」流の勉強法
「読む」読書 アメリカの「方法教育」 語学学習のために
「秀れた」指導者とは 環境という要因 独学のすすめ

3 「聞き取り」の技法 — 41

意味をもつ音 「聞き取り」の練習法 スイッチを入れる前に

イメージを描く 英語は英語のままで聞く さあ、始めよう
 二回目のヒアリング 物語を完成させる エッセイを聞いてみよう
 人物の描写を聞く 細部を注意深く

“しゃべること”を訓練する――71

“しゃべること”のはじまり 「正しい英語」はあるのか
 訛りとアクセント アメリカン・イングリッシュの多様性
 英語で交流するために “強勢”としてのアクセントとリズム
 英語の“音” 発音記号を利用する イントネーションというリズム
 感情のリズム 真似、オウムがえし 日常の会話は丸暗記
 一人二役で会話を学ぶ 芝居がかっていても 「英語の戸棚」を作る
 パターン・プラクティス ネイティブ・スピーカーは会話練習機ではない
 はつきりとしやべること 見えない大きな壁 科学者のプレゼンテーション
 ジーン先生のこと 本当は“テリブル”なスピーカー
 日本人のスピーチは向上したか “スピーチ”は魅力的に

5 読む力をつける

117

母語の読解力と外国語の読解力 文法を通しての学習

「文法」ばなれの教科書 中学校の教科書では 高校生の教科書

「文法」は何のために 品詞に分類する さまざまな名詞

修飾語としての形容詞 二つの冠詞 動詞と文型 動詞と変化

仮定の世界を述べるには 助動詞 副詞と前置詞と接続詞

代名詞とは 「読み方」について 速く読むためには

ある回答例 考え方の道筋 要点はなにか

6 「書くこと」と論理

171

まず、和文英訳から 秀れた指導者に出会うこと 論文とはどういうものか

分類から始まる論理構成 「排除すべき項目」を見つける

そして配置・配列 文化の背景 文章の正しさとは異なる問題点

書き手指向にする 書き方の手順と作法 パラグラフを設定する

全体の構成について 「論理」という接着剤 論理の「穴」をなくす

最後のチェック

7 外国語を学ぶなら、こんなふうに

199

非英語圏の人たち トマス・インモース先生へのインタヴュー

ラテン語の学習 直接法で学んだフランス語 丸暗記という勉強法

間違ふことを恐れないで 論理的思考と発表する訓練を

菅野カーリン先生へのインタヴュー 外国語を学ぶ目的 積み重ねの学習

ドイツ人にとっての英語 泉邦寿先生へのインタヴュー 世界語としての英語

フランス人と英語 英語一元論への疑問 英語だけでなく

参考・引用文献

あとがき

225

1

なぜ、英語を学ぶのか

日本人の英語は通じない？

「日本人は英語が下手だ」と、多くの日本人が嘆いている。

少数の上手な人々を除くと、もしかしたら日本人一般に、その苦手意識が滲透しているのかもしれない。「中学校で三年、高校で三年、短大卒なら計八年です。四年制の大学卒なら計十年ですよ。これだけ勉強して、なぜ日本人の英語は使いものにならないのでしょうか？」という声を、しばしば聞く。

「使いものになるか、ならないか」という発想は、昔はあまりなかったように思う。テレビなどを通して、英語を中心とする外国語がお茶の間にどんどん入ってくることもなかったし、外国人との実際の接触は、ごく少なかった。自分の英語が使いものになるのか、ならないのか、考えないでもすんでいたと言えるだろう。

だが今日のように海外へ出かける機会も増え、海外からも旅行者や滞在者が多くなってくると、「使いものになるかどうか」に、関心のポイントは移ってくる。海外からの訪問者と仕事の交渉をしようとしても、自分の英語がほとんど通じなかったという経験をしたとする。いや、通じたのかもしれないが、あまりてきぱきとは進展しなかった。そこへ脇から同僚などの助け船が出たりすると、（彼のはすつと通じたのに……）と劣等感を抱いてしまったりする。会話ではちよつとした実力の差が、非常に大きくみえるものだ。「苦手意識」というのは、つまり劣等感である。

日本人は、また、英語を第一外国語とする他の国の人々に比べても英語が下手であると言われている。ただこれは正確な統計があるわけでもないだろうし、「英語」とひとことで言っても読解力、

会話力などをどう捉えるかでも違ってくるので、漠然とした印象にすぎないのではないかと思う。しかし、この「漠然とした印象」は、何か確固たる事実であるかのように、多くの日本人の心の中に巣喰っているのではないだろうか。

「この事態を打開するには、どうしたらよいか?」。こうした問いかけは、日本人が得意とするものである。そしてその一つの対策としては、「では、小さいときから始めるのが効果的なのでは?」ということになり、二歳児から幼児むけ英語教室へ通わせる親が出現したり、小学校への英語教育の導入が検討されたりしている。

また、外国人教師の招聘、英語教育一般の改革、また町の英語学校へも人々はせっせと通い、巨額の授業料を納めている。日本人が英語学習に費やしているエネルギーと費用は、膨大なものになるのではないだろうか。

これだけの時間と労力、そして費用をかけ、では日本人の英語力は躍進したかというと、少数を除いては、そうではないらしいのだ。「まだダメだ」、「どうしてなのだろう」というような焦りの声が多く聞こえてくるからである。

英語は本当に必要か?

では、ここで最初の「日本人の英語はなぜ下手なのか?」という疑問に戻ってみることにしよう。

答えは簡単だ。「真の必要性がない」からである。こう断言すると、「いや、必要だ!」、「だから

困っているのだ！」、「認識不足も甚だしい！」などと反論が猛然と起こるかもしれない。

もちろん、英語を真に必要とする人々はいる。仕事や調査・研究を行なうにあたって英語を使わなければならない人々。種々の資格や、修士号なり博士号なりの取得を目指す人々。海外に移住したり、赴任し滞在する人々。その他の理由で英語の真の実力を身につける必要のある人々は存在する。だが、この数は、日本人全体からみれば、少数派であるに違いない。

あとの大多数の人々は、大学入試の英語問題に高得点を取りたい、企業への入社試験でも英語を重視するところがある、将来海外に赴任するかもしれないし、国際人になるためには、海外旅行をしたいし……などの理由で勉強しているのではないだろうか。

これくらいの理由でも、かなりの実力をつけてしまう語学の才能に恵まれた人々はいらるだろう。だが、真の必要性がないときには、実力はあまりのびないものである。そしてそのこと自体は、決して悪いことではない。

また、日常生活でも英語を介した外国人との接触はほとんどない、海外旅行はするが添乗員に頼るし、大学の難しい英語入試は受けないし関係ないという人々もいるだろう。

だが、日常生活で不自由していない人々も含めて、あまりに多くの日本人が、（英語ができないのは困ったことだ……劣ったことだ……）と感じていると取るのは、私の錯覚だろうか？

外国語が「必要」ということ

私たちにとっての英語とは、一つの外国語にすぎない。特別な状況にいる人だけでなく、もし日

本人一般がある外国語を真に必要とする状態にいとすれば、それはどういふことなのだろう。

フランスのノルマンディ地方に、バイユー (Bayeux) という都市がある。幸いにも第二次世界大戦の戦火をまぬがれた、ゴシック様式のノートル・ダム大聖堂をもつ美しい町である。

この都市の重要な美術作品が、マティルド公妃美術館に飾られている。フランス語では「タピスリー・ドウ・バイユー」(Tapisserie de Bayeux)、英語では「バイユー・タペストリー」(Bayeux Tapestry)とよばれている。タピスリーにしろ、タペストリーにしろ、中世の城館は、壁などをこれらの綴織つづりおりで飾ったものだった。だが、バイユーのそれは、「タピスリー」とよばれていながら、実は綴織ではない。帯のように、七〇メートルもの長さで続く細長い麻布。そこへ赤、黄、緑、青などの八色の毛糸で刺した刺繡なのだ。青は濃淡をまぜて三つの色合いが用いられている。

十一世紀末の作品と考えられているこの刺繡の主題は、一〇六六年の「ノルマンの征服」である。ノルマンディ公ギヨーム、のちに「征服王ギヨーム」(Guillaume le Conquérant)、または英語で「William the Conqueror」(1027/8-1087)とよばれるギヨーム、またはウィリアムは、イングランドの王位継承問題に乗じて兵を進め、ヘースティングス (Hastings) の戦でイングランド王に即位したハロルド二世 (Harold II, 1022-1066) を戦死させ、自ら王位につきイングランドにノルマン王朝を開いた。バイユーのタピスリーは、五十八場面を用いて、ギヨームのイングランド進攻を正当化しつつ描いた絵巻物である。どんな種類の馬、狩猟に使う犬やハヤブサがいたか、舟やその漕ぎ方、人々の衣服や食事風景、実にいろいろのことをそれは教えてくれる。そして戦闘場面になると、双方の楯、弓矢、鎧よろいや兜かぶと、剣や槍やり、斧などの武器や武具がどんなものであったかを克明に示してくれ

る。

この魅力的な刺繍絵巻は、イングランドにとっては一つの大きな転機、または始まりを示していた。イングランドの宮廷および上流、知識階級で用いられる言語が、もはやアングロ・サクソンの英語ではなくなり、征服者たちが持ち込んできたフランス語、正確にはノルマンディ地方で用いられていたフランス語になるという一大変化であった。アングロ・サクソン語は、下層階級の言語としては生き残るが、社会的な上昇を目指すものはフランス語を用いなければならなくなった。この状態は三〇〇年近くも続き、社交の場だけでなく、議会でも法廷でもフランス語が用いられた。

『真の必要性』とは、しばしば武力的な征服をともなつて起こるものである。より巨大な規模ではローマ帝国のラテン語、十九、二十世紀へとせば、植民地であつた多くのアジア・アフリカ諸国の現実がそれを示している。

自国語と外国語

日本語を特別な意識もせずに使うことを、多くの日本人は当たり前と考えるだろう。だがそれは、そうしたことを可能にする条件があつたからで、歴史的にみれば世界中どこでもそうだったわけではない。

私自身のささやかな経験を語ってみよう。一九五五（昭和三十）年、セントルイスのワシントン大学で勉強していたときのことだつた。まだ二十代の学生だつた私は、その大学で修士号を取るために勉強していた。あるパーティに出席すると、部屋の一隅にアメリカ人の知人の女性が他の女性

たちと話しているのに気付き、近付いて行った。

「キョウコ・カトウ、大学院でフランス文学を勉強しています」と知人が私を紹介すると、中央にすわっていた七十代の品のよい女性が、フランス語で話しかけてきた。

「この方、帝政ロシアの貴族の夫人よ」と、知人が私の耳許で囁いた。革命を逃れて亡命した白系ロシア人は、日本にも多くいる。でもなぜ日本人がフランス文学を勉強するのか、という質問をその女性は私にした。訛りのない実に見事なフランス語だった。

帝政ロシアの宮廷では、上流階級の言語はフランス語だったという記述を歴史の本で読んだような気がするが、その時の私は忘れていた。

「すばらしいフランス語をお話しになるのですね」と、私はその女性に言った。「当然です。私はフランス語の中で育ちましたもの」

「え？ でも、じゃあロシア語は？」。「ロシア語」と聞いた瞬間、彼女の表情は険しくなり、軽蔑したように口許が歪んだ。

「ロシア語なんて……あれは農民や下層階級の言語ですわ」

「じゃあ、ロシア語はおわかりにはならないんですか？」

「召使いが何を言っているかぐらいはわかります。でも自分ではしゃべれない」。しゃべれないということがむしろ誇らしいことであるかのように、その女性は断言した。

「ロシアの上流階級の言語は、フランス語だったんですよ。ロシア語ではありません」。隣にすわっていたやはり年輩の女性が、私に教えるように英語で言った。

この女性たちの言ったことが、どの程度正しいのか私にはわからない。だが、帝政ロシアの貴族階級の中には、「母国語」であるべきロシア語を劣った言語とみなし、外国語であるフランス語をより秀れたものとして使用していた人々がいた、とまでは言えるであろう。

自国語を軽蔑することは、自らを蔑むことにはならないのだろうか。（共産革命が起こる一つの土壌はあったのだな）と、私はその時、実感として納得してしまった。

ここは、日本

前にも触れたように、ある国の人々が外国語を真に必要とする場合を歴史的にみると、しばしば征服とか占領という厳しい現実と結びついてきた。つまり、他国に征服されたがゆえに、その国の言語を学ばなければならないという形である。

真の必要性がないときに外国語が上達しないのは、これは当然の話なのである。私の友人知人の中には、日本で英語を教えている英語圏の出身者も多いが、「日本人にとつての英語は、趣味みたいなものですね。本当には必要ないんだから」と言っている。日本の現実をみれば、必要とされているのは、むしろアジアの言語なのかもしれない。

もともと、日本もまた「英語支配圏」としてみられている可能性を垣間見たことが一度だけある。二、三年前、まだ私が現役だった頃の話であるが、英語圏出身の女性の先生が私たちの科に着任した。それぞれの研究室へ配られてくる大学からの様々な指示は、当然のことながら日本語でプリントされてくる。

「訳して下さい？」と、彼女は度々プリントを私の所へもってきたので、私はその度に英訳して読み上げた。すると、ある日、「どうして大学の指示は日本語でくるの？」と彼女が言い出したのである。私は（えっ）と驚いた。「当たり前じゃありませんか。ここは日本の大学ですもの。あなたは日本の大学に就職したのよ」

ところが、彼女はきつぱりと言い返した。「だって日本は、アメリカや他の連合国に占領された国じゃありませんか」

戦後生まれの若い教師の吐いたこの言葉は、私にとって思いがけないものだったと同時に、私をひどく怒らせてしまった。

「いい？ これだけはわかって頂戴よ。大学からの指示をいちいちあなたのために英訳するのは、私の義務ではないの。もうこれからは英訳しないから、自分で日本語を勉強して、自分で読んで頂戴」。まくしたてた私に対し、彼女は謝らず、プリントを手にしたまま黙って私の研究室から出て行った。そして後日談だが、本当に日本語のレッスンを取り出したのである。

だがあの意見は、全く彼女の個人的な見方と割り切ることとはできないのかもしれないという疑問が残った。母語の問題は国民のアイデンティティに関係する複雑な問題であるが、優位にある言語の人々はそのことを忘れがちである。

なぜ英語を勉強するのか

英語力を必要とする人々は、勉強方法を工夫して確実に力をつければよい。だが、「必要ない」、

「英語の勉強はしたくない」と考えている人々に対して、妙な劣等感を植えつける雰囲気をもし出すのには反対だ。

後者のグループに属す人々には、堂々と、「私は英語はわかりません。日本語で話したいと思います」、「複雑な話ならば、通訳をたのみます」と言ってもらいたいし、また、言えばよい。

利害関係のからまない友好的雰囲気での交流ならば、知っている英単語を並べてもよいだろう。だが基本的には、自分は英語ができない、日本語だけであることを、爽やかに言えばよいのではないだろうか。

こういう発言を私があると、ちょっと意外に思う方もおられるかもしれない。一九七二（昭和四十七）年に十数年住み慣れたアメリカから帰国した私は、その翌年、大学に語学教師としての職を得る幸運に恵まれ、一九九五（平成七）年に定年退職するまでの二十三年間、外国語教育にあたってきた。大学の教壇で教えた課目はフランス語であるが、雑誌記事や本では英語勉強の方法などについて書いてきた。

今までに書いてきたつたない本や記事の読者、また大学でのかつての教え子たちの多くは、私を外国語教育の信奉者、推進者とみなして下さるのかもしれない。卒業生たちの年賀状には、「卒業後の十数年間、フランス語を使う機会もなく、勉強を怠ってきました。でも今年はどうにか時間をみつけ、テキストを開きたいと思います」、「今年は今心機一転、英語を勉強するつもりです」というような、外国語学習に関する決意が多く綴られているからである。

ただ、私自身としては、教壇に立った最初の日から、「外国語に対して妙な劣等意識は抱くべき